神無月とは陰暦十月の異称―。

かみな‐づき【神無月】

（神の月の意か。また、八百万（やおよろず）の神々が、この月に出雲大社に集まり他の国にいないゆえと考えられて来た。また、雷のない月の意とも、新穀により酒をかもす醸成月（かみなしづき）の意ともいわれる。）‐(略)‐ かみなしづき。かんなづき。‐(略)‐

『広辞苑第七版』

睦月、如月、弥生、卯月、皐月、水無月、
文月、葉月、長月、神無月、霜月、師走。

一年十二か月、春夏秋冬の美しさを大和言葉で表す和風月名は和暦のひとつです。
和暦とは、大陸から旧暦が伝来する以前に存在したと推定される
日本独自の自然暦・農事暦・祭事暦のこと。
連綿と受け継がれてきた日本人の日々の暮らしや文化、
育み続けてきた和の心が読み取れます。
『万葉集』で詠まれた四季折々の歌の中にも
和風月名の“十月（かむなづき）”の言葉が何首かみえ、いずれも時雨（しぐれ）を詠んでいます。

十月（かむなづき） しぐれにあへる 黄葉（もみじば）の 吹かば散りなむ 風のまにまに

大伴宿禰池主（おおとものすくねいけぬし）

『万葉集』巻 8－1590

十月のしぐれに逢って濃く色づいたもみじは、風が吹いたら
はらはらと散ってゆくことであろう。風の吹くにまかせて。

ふるさとの風
令和元年　神無月

万葉集

―神風の伊勢―

古の時代から、伊勢の国は都に近い国としてまた伊勢神宮に象徴される神の国として、文学作品にも絶えず描かれてきた。

神々の物語『古事記』『日本書紀』、斎宮が一つの舞台として登場する平安初期の歌物語『伊勢物語』、また『万葉集』には伊勢の国を詠んだ歌が数多く載せられている。

『万葉集』は奈良時代末期に成立した現存する日本最古の和歌集で、全二十巻からなる。天皇や皇族、歌人、防人、農民など幅広い階層の人々が詠んだ約四千五百首もの歌が収められ、所収歌の歌体は短歌が大部分で、長歌、旋頭歌、仏足石歌、連歌を含む。歌の内容による分類は、雑歌（儀礼歌や旅の歌、宴席の歌など）、相聞（離れている者同士、特に男女が交わす贈答歌）、挽歌（人の死に関わる歌）の“三大部立て”を基調とする。

『万葉集』という名前の由来は諸説ある。あらゆる言の葉をとりあつめたものと解する説、歌を「葉」にたとえ、多くの歌の集成と考える説、「万葉」という語に万代、万世の意があることから、この歌集が万代に伝わるよう予祝したという説などがある。

是の神風の伊勢国は、則ち常世の浪の重浪帰する国なり。
傍国の可怜国なり。是の国に居らむと欲ふ。

『日本書紀』

この神風の伊勢国は、常世の波がしきりに打ち寄せる国である。
大和から片寄った遠い国で美しいよい国である。この国に居たいと思う。

『日本書紀』によれば、第十一代垂仁天皇の即位二十六年、倭姫命は上のような天照大神の神託を受け、宇治の五十鈴川のほとりに皇大神宮が創建されたと伝える。

常世とは寄せくる波のように、永久不変の美しい風景。傍国とは、一説に、一方が山、他方が海というような地形の国。可怜国とは美しい国のこと。伊勢の国は、豊穣の海から波が寄せ来る風光明媚な地であったのである。

～神風の伊勢～

「神風の」は伊勢にかかる枕詞である。

※まくら−ことば【枕詞・枕言葉**】**①昔の和歌などに見られる修辞法。特定の語の上にかかって修飾または口調を整えるのに用いることば。働きは序詞に似るが、五音以下で慣用的な用法である点に特徴がある。−(略)−　　(『広辞苑第七版』)

※神風の…伊勢の枕詞。神風は神の吹かせる激しい風の意。『倭姫命世記』に「伊勢の風早の国」とあり、伊勢は風荒い国として知られ、この枕詞は記紀歌謡にも見える。壬申の乱の際に吹いて勝利の一因となった大風も、伊勢の神助と信ぜられ、天武天皇以後、朝廷は伊勢神宮を格別に尊崇した。

(『新編日本古典文学全集』)

「神風」は古くは「かむかぜ」、現代では「かみかぜ」と読む。

万葉の時代、これを文学史上では上代というが、その時にはすでに「神風」は伊勢と深

い関わりをもった語となっていた。『万葉集』中の七首に「神風」の言葉がみられる。

・神風の　伊勢娘子ども　（巻１－81）
・神風の　伊勢の国は　（巻２－162）
・神風の　伊勢の国にも　（巻２－163）
・渡会の　斎宮ゆ　神風に　い吹き惑はし　（巻２－199）
・神風の　伊勢の浜荻　（巻４－500）
・神風の　伊勢の国は　（巻 13－3234）
・神風の　伊勢の海の　（巻 13－3301）

齋藤平氏の著書、『「神風の」考』（伊勢神宮崇敬会叢書 18）は、「神風の」について詳しくふれている。

『万葉集』には三重県に関係する歌が四十九首登場するとされるが、そのうち伊勢志摩を詠んだ歌も多く見られる。

『万葉の歌―人と風土 12 東海』に加藤静雄氏がこのように記している。

「神風の伊勢の国は、海の国である。海をもたない大和の人々にとって、海は驚異の存在であった。だから万葉人は、海を見れば驚きとあこがれの歌を詠んだ。もちろん海は大和に近く、難波の江がある。近江の大湖も大和人には、海であった。いくらかの人々は、紀伊国の海や、瀬戸内の海も知っていた。大陸への渡航という、命を賭した旅の海もあったが、それは特別な人たちのものであった。大和に比較的近い、難波や近江の海に比べて、大波が寄せ、岸に砕ける伊勢の海は、大和人にとって海の中の海であった。」

～伊勢の海～

伊勢国に幸せる時に、安貴王の作る歌一首

伊勢の海の　沖つ白波　花にもが　包みて妹が　家づとにせむ　（巻３－306）

伊勢の海の　沖の白波は　花であればよいのに　包んで妻への　おみやげにしよう

※安貴王→志貴皇子の孫。春日王の子。妻は紀女郎。

この歌は、元正天皇が養老二年（718）美濃・尾張・伊賀・伊勢行幸の際、北伊勢の海岸で王が詠んだものである。

碁檀越、伊勢国に行きし時に、留まれる妻が作る歌一首

神風の　伊勢の浜荻　折り伏せて　旅寝やすらむ　荒き浜辺に　（巻４－500）

（神風の）伊勢の浜荻を　折り伏せて　夫は旅寝していることであろうか　荒涼とした浜辺で

※碁檀越→伝未詳。碁は氏で、檀越は仏のために財物を布施するもの。
※浜荻→浜辺に生えているヲギ。ヲギは水辺の原野などに生えるいね科の多年草。
※題詞に「伊勢国に行きし時に」とあるが、それが持統六年（692）春の伊勢行幸の時と同じか否か不明。

歌碑…伊勢市二見町三津・三津土地改良記念碑横

笠女郎が大伴宿禰家持に贈る歌二十四首（二十三首略）

伊勢の海の　磯もとどろに　寄する波　恐き人に　恋ひ渡るかも　（巻４－600）

伊勢の海の磯もとどろくほどに激しく　寄せ来る波のように　恐れ多いお方を恋しく思い続けています
※笠女郎→伝未詳。家持と関係のあった女性の一人。
※恐き人→畏れ多い人。作者は家持と自分との身分の違いを考えて近寄りがたいと思ったのである。

狭残の行宮にして、大伴宿禰家持が作る歌二首

大君の　行幸のまにま　我妹子が　手枕まかず　月そ経にける　（巻６－1032）

天皇の　行幸に供奉して　わが妻の手を　枕にせずに　月日が過ぎてしまった

御食つ国　志摩の海人ならし　ま熊野の　小船に乗りて　沖辺漕ぐ見ゆ　（巻６－1033）

御食つ国の　志摩の海人ではないか　熊野の　小船に乗って　沖辺を漕いでいる

※大伴宿禰家持…（718？～785）大伴旅人の長男で、大伴坂上郎女は叔母。最多の四百七十三首を収載し、巻十七から最終巻二十までの四巻は、家持を軸とする「歌日記」といわれる。質量ともに充実しているのが、天平十八年（746）から越中国守をつとめた五年間。位は中納言従三位にとどまった。万葉集編纂に深く関わったとされる。
※狭残→所在未詳。「狭残」をザザと読んで「神名帳」の多気郡佐々夫江神社の地（三重県多気郡明和町大淀）などに擬する説もあるが疑わしい。※御食つ国→天皇の御食事の材料となる物を奉る国。※志摩→国名。三重県の鳥羽市と志摩郡（現志摩市）とに当る。※ま熊野の小船→まは接頭語。熊野製の船。「熊野」は紀伊半島南部。良材を産し、外海に面しているので造船が盛んだった。

以下の五首は、作者未詳。

伊勢の海の　海人の島津が　鮑玉　取りて後もか　恋の繁けむ　（巻７－1322）

伊勢の海の　海人の島津の　真珠は　手に入れた後も　恋しさは変らないのではなかろうか
※海人の島津→島津は未詳。『仙覚抄』に「島津トハ島人ナリ。東人ヲアヅマツト云ガゴトシ」とある。あるいは人名か。※鮑玉→あわびの中の真珠のことだが、あこや貝の玉など同種のものをも合わせていう。
※恋の繁けむ→この恋は同居するようになった後も慕わしく思うことに用いた。

酢蛾島の　夏身の浦に　寄する波　間も置きて　我が思はなくに　（巻 11－2727）

酢蛾島の　夏身の浦に　寄せる波のように　間もあけずに　わたしは思っている

※酢蛾島の夏身の浦→酢蛾島・夏身ノ浦共に所在未詳。一説に酢蛾島は三重県鳥羽市の菅島かとする。

伊勢の海人の　朝菜夕菜に　潜くといふ　鮑の貝の　片思にして　（巻 11－2798）

伊勢の海人が　朝夕の食料にいつも　潜って採るという　あわびの貝のように　片恋のままで

※朝菜夕菜に→朝夕の食料として。

伊勢の海ゆ　鳴き来る鶴の　音どろも　君が聞こさば　我恋ひめやも　（巻 11－2805）

伊勢の海から　鳴いて来る鶴のように　遠音だけでも　あなたが聞かせてくださるなら　わたしは恋い焦れるものですか

※伊勢→国名。三重県の中央から東北部にかけての一帯。ただし、この南にある志摩国などを含めた多少不正確な呼び方が当時一般的には使われていた。※音ドロ→未詳。遠く聞こえる音響の意か。

神風の　伊勢の海の　朝なぎに　来寄る深海松　夕なぎに　来寄る股海松　深海松の深めし我を　股海松の　また行き帰り　妻と言はじとかも　思ほせる君　（巻 13－3301）

（神風の）伊勢の海の　朝なぎに　寄り来る深海松　夕なぎに　寄り来る股海松　（深海松の）深く思ったわたしを　（股海松の）　また戻って来て　妻と言うまいと　思っておられるのですかあなたは

※深海松→海中深い所に生えているミル。ミルは、みる科の海藻。※妻と言はじとかも思ほせる君→行ったきりもう帰って来ず、わたしを妻と呼ぶ気がないのでないかあなたは、の意。

伊勢志摩においては、海を背景にして詠まれた歌が際立って多い。
伊勢の青い海と砕ける白い波は、より深く広く万葉人の心に浸透していたことが窺える。
「何人かの万葉人は伊勢の海に恋心を託して歌う。万葉人の観念の中に、伊勢の海の激しく打ち寄せる波は、心を揺さぶってやまぬ恋の激しさとイメージが重なって実在したにちがいない。伊勢の海は恋の海なのだ。」　（『万葉の歌―人と風土 12 東海』加藤静雄／著）

万葉の時代、神風の伊勢の国は、政権の中心地の大和地方と深い関わりを持っていた。

「今日の三重県を構成している伊勢・伊賀・志摩及び紀伊の四ヶ国は、記紀や万葉集に、上代人たちの活動の場としてしばしばその名を登場させている。それはここが大和の国にすぐ隣し、大和朝廷の勢力の伸張と共に人々の往来の頻繁となった東国への通路に当って居り、また中でも風光明媚な伊勢志摩の海は大和の国に住み馴れた人々にとっては特に珍しく好ましい遊覧地であったためであろう。-(略)-東国への往き還り、行幸に供奉した公の旅、

或は遊覧や所用に出で立つ私の旅において、これらの道順によった万葉の人々がいかに美しくあわれ深い数々の詠歌を我が三重の地にうたい残しているか、-(略)-」

（万葉三重『三重の文学』植村文夫／著）

『万葉集』にみる伊勢を歌う歌人たちの多くは中央の貴族層に属する人々で、旅をしながら春夏秋冬伊勢の風景を歌うのである。さらに、柿本人麻呂や笠女郎のように大和の地にいながらも伊勢を思い歌に詠んだ歌人もいた。そのほとんどが旅に関係したものである。

～持統天皇と伊勢～

※持統天皇…大化元年～大宝二年（645～702）天智天皇の皇女で、天武天皇の后。政治家として優れた才幹を発揮。天武没後、草壁皇子（くさかべのみこ）と政務に当るが、皇子病没後即位し、中国の様式にならった最初の都、大和三山に囲まれる藤原京を造営、持統八年（694）に遷都した。律令体制の確立に意欲的であった。

持統六年（692）三月、持統天皇は伊勢に行幸した。天皇の地位にある方の伊勢行幸はこれが最初で歴史的に大きな意義を持つものであったとされる。

『万葉集』には、その際に詠まれた歌が何首か載せられている。

伊勢行幸に供奉せず飛鳥浄御原宮に留まった柿本人麻呂はかつて伊勢志摩を訪れた時の情景を偲んで三首の歌を詠んだ。これを留京三首と呼ぶ。

※柿本朝臣人麻呂…生没年未詳。万葉集以外に所伝はなく、低い官位で終ったものか。持統天皇の行幸に供奉し、宮廷歌人としてすぐれた献呈歌を詠んだほか、私的にも秀作を多く残した。その作は雄大な構想力と洗練された修辞を備え、特に長歌にその特色を発揮した。伝統と独創との巧みな調和は、万葉集だけでなく、和歌史上屈指の歌人と評される。

伊勢国に幸せる時に、京に留まれる柿本朝臣人麻呂が作る歌

あみの浦に　船乗りすらむ　娘子らが　玉裳の裾に　潮満つらむか　（巻１－40）

あみの浦に　船遊びをしているであろう　その乙女たちの　玉裳の裾に　潮が満ちていることだろうか

※あみの浦（嗚呼見乃浦）→三重県下であろうが、所在未詳。鳥羽市小浜町に現在も「あみの浜」という地名があるのを拠り所にその辺りかとする説もあるが確実でない。※娘子ら→供奉の女官たちをさす。作者の恋人もその中にいたのであろう。※玉裳→裳は女子が腰に着ける巻きスカート式の衣服。玉は美称。あるいは、真珠やガラス玉の類を飾り付けた華やかな裳をいうか。

釧つく　答志の崎に　今日もかも　大宮人の　玉藻刈るらむ　（巻１－41）

（釧つく）答志の崎で　今日もなお　官女たちは　玉藻を刈っていることだろうか

※釧つく→地名タフシにかかる枕詞。クシロは銅や玉・石などで製したブレスレット。地名タフシを手の関節と解し、釧が巻き付けられた手首の意でかけた。※答志の崎→三重県鳥羽市答志町。鳥羽港外北東の答志島。「答志の崎」が島内のどこをさすか不明。あるいは船がかりのできる、東部の大字答志の近くを思い浮かべたものか。※大宮人の玉藻刈るらむ→女官たちが遊びに海人の手わざをするさまを想像して詠んだ。

歌碑…鳥羽市答志町八幡神社入口

潮さゐに　伊良虞の島辺　漕ぐ船に　妹乗るらむか　荒き島廻を　（巻１－42）

潮騒の中で　伊良虞の島辺を　漕ぐ船に　彼女も乗っていることだろうか　荒い島の周りを

※潮さゐ→潮の流れと風とがぶつかって生じる波のざわめき。伊良湖では今もこれを「しおざい」と呼んでいる。島や暗礁のある付近ではしばしば起る現象。※伊良虞の島辺→伊良湖は三河国に属するが、作者は伊勢行幸と聞いてこの地名を思い浮かべたのであろう。この行幸は三河国に及んでいない。※妹→作者の恋人で行幸に供奉している女官をさすか。※荒き島廻→荒涼とした島の周辺。

この伊勢行幸の際に、供奉した夫の旅程をその妻が京に留まって思いを寄せた歌。

当麻真人麻呂が妻の作る歌

我が背子は　いづく行くらむ　沖つ藻の　名張の山を　今日か越ゆらむ　（巻１－43）

わたしの夫は　どこ辺りを行っていることだろうか　（沖つ藻の）名張の山を

今日あたり越えていることだろうか

※当麻真人麻呂→伝未詳。真人は姓。当麻氏は用明天皇の皇子麻呂古王の子孫。沖つ藻の→地名名張の枕詞。沖ツ藻は海中の藻の意。このオキは水底をさす。※名張の山→名張は三重県名張市。伊勢と大和との境をなし、大化二年（646）の詔でも畿内の東限の地に当てられている。名張市西方の山をいうか。当時、駅家（同市西南部丈六の辺りか）が設けられており、壬申の乱の際、吉野を脱出した天武一行が夜間ここを通過するために駅家を焼いたとある。　歌碑…名張市平尾近鉄名張駅前小公園

行幸に供奉した夫が京に留まる妻を思う歌。

石上大臣、従駕して作る歌

我妹子を　いざみの山を　高みかも　大和の見えぬ　国遠みかも　（巻１－44）

（我妹子を）いざみの山が　高いせいか　大和が見えないが　国が遠いせいなのか

右、日本紀に曰く、「朱鳥六年壬辰の春三月、丙寅の朔の戊辰に、浄広肆広瀬王らを以て留守の官となす。ここに、中納言三輪朝臣高市麻呂その冠位を脱きて朝に擎上げ、重ねて諫めまつりて曰く、『農作の前に、車駕未だ以て動すべからず』とまうす。辛未に、天皇諫めに従ひたまはず、遂に伊勢に幸す。五月乙丑の朔の庚午に、阿胡の行宮に御す」といふ。

右は、日本書紀に「朱鳥六年三月三日に、浄広肆の広瀬王たちを留守官に残して行幸されること

になった。そこで中納言三輪朝臣高市麻呂はその冠位を投げ捨てて御前に捧げ、重ねて『農繁期の前に行幸なさるべきでございませぬ』とお諫めした。しかし、六日、持統天皇はその諫言に従わないで、ついに伊勢国に行幸された。五月六日に阿胡の行宮においでになった」とある。

持統天皇の伊勢行幸については『日本書紀』により上記のような挿話が伝えられている。

※石上大臣→慶雲元年（704）右大臣、和銅元年（708）左大臣。伊勢従駕当時はまだ大臣ではない。
※我妹子を→山名イザミに、さあ見ようの意を持たせてかけた枕詞。※いざ見の山→伊勢・大和国境の高見山か。※朱鳥六年→持統六年。※戊辰→三日。太陽暦の三月三十日に当る。※浄広肆→天武十四年（685）に制定された位階制における、諸王以下に授けた位の一つ。大宝令の従五位下に相当。※広瀬王→小治田広瀬王ともいう。天武十年（681）帝紀および上古の諸事の記録に従事し、同十三年浄広肆の位の時、宮都の造営予定地を視察、持統六年（692）伊勢行幸の時の留守官を務めた。※留守の官→行幸期間中宮都の留守を預かる官。※中納言→太政官の次官。大納言に次ぐ。後代の中納言とは直接つながらない。
※三輪朝臣高市麻呂→旧姓三輪君。天武十三年（684）に賜姓。大神朝臣・大三輪朝臣ともいう。壬申の乱に功があり、中納言、長門守、左京大夫を歴任。慶雲三年（706）従四位上をもって五十歳で卒。贈従三位。持統天皇の伊勢行幸を冠位を捨てて諫止しようとしたことは『霊異記』上・二十五話にも見え、忠臣として賞揚されている。※車駕→行幸時の天皇に対する尊称。

伊勢行幸の翌年、持統七年（693）九月九日、天武天皇の祥月命日の夜、持統天皇は亡くなってすでに八年を経ている夫の夢を見て、一首の歌を詠み覚えた。

天皇の崩りましし後の八年の九月九日、奉為の御斎会の夜に、
夢の裏に習ひ賜ふ御歌一首　古歌集の中に出でたり

明日香の　清御原の宮に　天の下　知らしめしし　やすみしし　我が大君　高照らす
日の皇子　いかさまに　思ほしめせか　神風の伊勢の国は　沖つ藻も　なみたる波に
塩気のみ　かをれる国に　うまこり　あやにともしき　高照らす　日の皇子

（巻２－162）

飛鳥の　清御原の宮で　天下を　お治めになった（やすみしし）わが大君の（高照らす）日の御子である先帝は　どのように　お思いになってか（神風の）伊勢の国は　沖の藻も　なびいている波に潮の香が立ちこめている国に（うまこり）たまらないほどお逢いしたい（高照らす）日の御子

※御斎会→参集した僧侶に食物を供養する法会。※夢の裏→持統天皇が夢の中で詠んだ入眠幻覚の歌。
※明日香→奈良県高市郡明日香村飛鳥を中心とする一帯の地。※高照らす→「日の皇子」（ここは天武）の枕詞。※伊勢の国→天武天皇は伊勢国に格別深い関心を持っていたと思われ、壬申の乱の際も朝明郡（今の四日市辺り）を通過した折に伊勢神宮を遥拝し、その甲斐あって神助の風が吹いて天武方の勝利を導いたといわれる。※かをれる国に→カヲルは煙や霧が立ちこめること。
※うまこり→トモシの枕詞。「味凍」とも書く。魚菜類の煮こごりの美味なものをいうか。※ともしき→心引かれる、好ましい、の意。

やすみしし　わご大君　高照らす　日の皇子の　聞こし食す　御食つ国　神風の
伊勢の国は　国見ればしも　山見れば　高く貴し　川見れば　さやけく清し　湊なす
海も広し　見渡す　島も名高し　ここをしも　まぐはしみかも　かけまくも
あやに恐き　山辺の　五十師の原に　うちひさす　大宮仕へ　朝日なす　まぐはしも
夕日なす　うらぐはしも　春山の　しなひ栄えて　秋山の　色なつかしき　ももしきの
大宮人は　天地と　日月と共に　万代にもが

作者未詳　（巻 13－3234）

（やすみしし）わが大君の（高照らす）日の皇子の天皇が　お治めになる　御食つ国の（神風の）
伊勢の国は　国見をすれば　その山は　高く貴いし　その川は　清くさやかだ　湊のような形の
海は広いし　見はるかす　島も名高い　これらすべて　見事なためか　申すも無性に恐れ多い
山辺の　五十師の原に（うちひさす）大宮を営まれて　朝日のように　見事なことだ　夕日のように
素晴らしいことだ　春山のように　たおやかに生き生きとして　秋山のように　色目もあやな
（ももしきの）大宮人は　天地　日月と共に　万代までも変らずにあろう

反歌

山辺の　五十師のみ井は　おのづから　成れる錦を　張れる山かも　（巻 13－3235）

山辺の　五十師の御井は　天然に　織りなされた錦を　張り広げた山だな

※この二首の歌の詠まれた時期について、持統六年（692）三月の伊勢行幸の時、大宝二年（702）十月の三河行幸の時など、諸説がある。また元正天皇の霊亀三年（717）九月の美濃行幸の時と考えられなくもない。春秋の別も決し難いが、「やすみしし…日の皇子」の語の使用から持統天皇の二回の行幸のうちのいずれかとみるべきか。

～伊勢斎宮～　大伯皇女と大津皇子

天武天皇の皇女である大伯皇女は弟・大津皇子を亡くした悲しみを歌に詠んだ。

大津皇子、竊かに伊勢神宮に下りて上り来る時に、大伯皇女の作らす歌二首

我が背子を　大和へ遣ると　さ夜ふけて　暁露に　我が立ち濡れし　（巻 2－105）

あの人を　大和に帰し見送ろうとして　夜も更けて　暁の露に　わたしは立ち濡れたことよ

※我が背子→夫や恋人に用いることが多い。※暁露→アカトキはアカツキの古形。原文「鶏鳴」は『新撰字鏡』にも「鶏鳴、丑時」とあり、一番鶏が鳴く時刻という意味だが、実際は夜明けに程遠い深夜の午前二時前後をいう。

二人行けど　行き過ぎ難き　秋山を　いかにか君が　ひとり越ゆらむ　（巻 2－106）

二人で行っても　行き過ぎにくい　秋山を　どんなにしてあの人は　ひとり越えていることやら

大津皇子の薨ぜし後に、大伯皇女、伊勢の斎宮より京に上る時に作らす歌二首

神風の　伊勢の国にも　あらましを　なにしか来けむ　君もあらなくに　（巻２－163）

（神風の）伊勢の国にでも　いればよかったのに　なんで来たのだろう　あの方もいないのに

※君もあらなくに→大津皇子もこの世にいないのに。

見まく欲り　我がする君も　あらなくに　なにしか来けむ　馬疲るるに　（巻２－164）

逢いたいと　思うあの方も　いないのに　なんで来たのだろう　馬が疲れるだけなのに

大津皇子、死を被りし時に、磐余の池の堤にして涙を流して作らす歌一首

百伝ふ　磐余の池に　鳴く鴨を　今日のみ見てや　雲隠りなむ　（巻３－416）

右、藤原宮の朱鳥元年の冬十月

（百伝ふ）磐余の池に　鳴いている鴨を　今日だけ見て　死んで行くのか

※百伝ふ→地名磐余の枕詞。※磐余の池→奈良県桜井市の西南部、香久山の東北にあった池。「履中紀」二年に磐余の池を作ったとあるが、現在その遺址なく、範囲を明らかにしない。一説に JR 桜井線香久山駅の南、東尻池町御厨子神社周辺の低地に擬する。※鳴く鴨→鴨は秋飛来し春北帰する。処刑された十月三日は太陽暦の十月二十八日に当る。

※大伯皇女…斉明七年～大宝元年（661～701）天武天皇の皇女。大来皇女とも記す。大津皇子の同母姉で、名は備前国大伯で生まれたことにちなむ。天武天皇二年（673）斎宮となり伊勢神宮で仕えた。天武崩御後朱鳥元年（686）、任を解かれて帰京するが、その帰京は大津皇子没後であった。

※大津皇子…天智二年～朱鳥元年（663～686）母は持統天皇の姉、大田皇女。容貌、度量ともに申し分なく、学を好み武にも秀で、人望も厚かったと『懐風藻』（現存最古の漢詩集）は記し、『日本書紀』は、詩賦は大津皇子から興ったと記す。皇太子に次ぐ立場で国政にも関わったが、謀反の罪で刑死。『懐風藻』にも死に臨む心情を詠む詩を残す。

五言。臨終。一絶。

金烏西舎に臨らひ、鼓聲短命を催す。
泉路賓主無し、此の夕家を離りて向かふ。

『懐風藻』

日は西の家屋を照らし（西に傾き）、
夕刻を告げる鼓の音は自分の短い命を更にせきたてるように聞えてくる。
死出の道（よみ路）には客も主人もなく自分独りだ、
この夕べ自分は家を離れて独り死出の旅路へ向うのである。

～万葉集と澤瀉久孝（おもだかひさたか）～

澤瀉久孝

明治二十三年～昭和四十三年（1890～1968）。日本の国文学者、万葉学者。文学博士。フランス哲学研究者澤瀉久敬（おもだかひさゆき）は実弟。三重県度会郡宇治山田町（現伊勢市）大字今在家三番屋敷にて、澤瀉久富、よねの長男として出生。久富は、元宇治山田市長。生家は代々、伊勢神宮の御師であった。

三重県立第四中学校、第三高等学校を経て京都帝国大学卒業。京都帝国大学教授、名誉教授。昭和三十七年（1962）皇學館大学兼任教授。万葉集の研究に専念し、訓話注釈に業績を残した。萬葉学会会長として雑誌『萬葉』を主宰。また『萬葉集大成』の編集執筆にもあたった。昭和四十二年（1967）、『萬葉集注釈』全二十巻の完成に対し朝日賞が贈られた。翌年、勲三等旭日中綬章受章。『萬葉集注釈』最終巻の発売を目前に七十八歳の生涯を終えた。墓は伊勢市宇治浦田町の今北山墓地。

『萬葉の作品と時代』『萬葉古径』『萬葉集講話』等、著書多数あり。

「萬葉集といふものは、だいたいわかつてゐて、ところどころにわからないところがある、さういう風に考へてをられる方が多いやうな氣がする。そしてそのむつかしいところをより出して、あれはどう訓みますか、ここはかう解くべきではないでせうか、などと聞かれる。しかし私にはそんななまやさしいものではない。私が萬葉集を讀みはじめてから五十年に近い歳月がたつ。大學で萬葉を講じそめてからでも、卅餘年の月日が流れてゐる。それにもかかはらずわからないところだらけである。」

澤瀉久孝の大著『萬葉集注釈』全二十巻（中央公論社）は、この文章から始まる。
昭和三十二年（1957）に第一巻を刊行、十一年の年月を費やして全巻が完結した。

「…もつと手つ取りばやく、しかも得心のゆくやうな參考書がないものかと思ふ。さういふ事を考へながら私はこの注釋書を書いた。この注釋書は何よりもまづ私自身の為なのである。あちらの書物を開いたりこちらの書物を開いたりしないで、これさへあれば一應事が足りるやうなものを作つておきたいといふのが私の願ひである。」

『萬葉集注釈』はこのような思いで執筆を手掛けたのである。
他の古典文学の注釈書に比較すると、様々な説を紹介し懇切丁寧に解説している。

「先年私は、「萬葉集は大伴家持が作歌勉強の爲の歌ノートである」と書いた事があるが、今の人にとつても萬葉集はそれを讀む人々のそのひとりひとりの心の糧である。從つてそれを讀む人々ひとりひとりに自分自身の注釋があつてよい。注釋の究極所はさういふものだと思ふ。」

【澤瀉久孝文庫】

主著『萬葉集注釈』の自筆稿本をはじめとする蔵書が皇學館大学附属図書館に所蔵、公開されている。

「澤瀉久孝文庫に収録されている図書は6,773冊で、洋装本だけでなく多くの和装本もあり、なかには貴重な稀覯書(きこうしょ)も含まれており、先生の御研究領域の広さと深さが知られる。和装本では図書・漢籍・仏典に、洋装本では萬葉集関係を中心に国文学の各分野に及んでいる。」

『澤瀉久孝文庫目録（皇學館大学附属図書館蔵書目録)』昭和五十七年（1982）三月

～英語と万葉集～

『英語でよむ万葉集』リービ英雄／著は、約五十首の対訳それぞれに作家独自のエッセイを付す。例えば、彼独自の感性で英訳すると…こうなる。

あみの浦に　船乗りすらむ　娘子らが　玉裳の裾に　潮満つらむか　（巻１－40）

On Ami Bay, the girls must now
be riding in their boats.
Does the tide rise to touch the trains
of their beautiful robes?

リービ氏は記している。

万葉集にたどりついたとき、「古い日本語」というよりも、「とても新しい文学」に出会ったという不思議な感じがした。それだけ、万葉集は新鮮だった。

万葉集も神宮と同じ。古くて新しい―「常若」なのである。

～はるか千年以上の時間を越えて～

『万葉集』二十巻、歌番号にして四五一六首を数える歌々の中で、地名の詠まれた歌は、約一二〇〇首。万葉歌全体の四分の一強に及ぶ歌数を数える。言い換えれば万葉歌は四首に一首は地名が詠み込まれているということになる。

地名の数で言えば、同じ呼び名の地名を一つとして数えて、約一二〇〇余の地名が詠まれている。-(略)-

こんにちの景観は万葉びとの見た景観と同じではないにしても、万葉びとが歌に歌った同じ場に立ってその景観を見ることによって、万葉びとが歌った感動が生き生きと実感される。　（万葉逍遥『万葉集入門（別冊太陽）』坂本信幸／著）

山見れば　高く貴(たふと)し

川見れば　さやけく清(きよ)し

湊(みなと)なす　海も広し

（巻 13－3234）

万葉集に詠われた伊勢の美しい風景は永遠の理想郷…

はるか千年以上の時間をこえて万葉集にいきつくことができます。

数多の歌で編まれた万葉集…
万葉人の息遣いが聞こえてくるようです。

初春の令月にして、気淑(よ)く風和(やわら)ぎ、

梅は鏡前(きょうぜん)の粉(こ)を披(ひら)き、蘭は珮後(はいご)の香(こう)を薫(かおら)す。

（巻 5－815～846 梅花の歌三十二首 併序）

新しい元号の「令和」の二文字は
『万葉集』の「梅花の歌三十二首」の序文から引用されました。
「大化」以来、二百四十八を数える元号の中で、
日本の古典が出典となったのは初めてです。

図書館だより 10 月号 №212 増刊　ふるさとの風 令和元年神無月　令和元年(2019)10 月 1 日発行
(編集・発行) 伊勢市立伊勢図書館　指定管理者／株式会社図書館流通センター　(住所) 〒516-0076　伊勢市八日市場町 13-35
(電話) 0596-21-0077　(FAX) 0596-21-0078　(ホームページ) http://iselib.city.ise.mie.jp/
© 2019 mami ishikura

―本文で紹介した他に伊勢志摩に関する歌―

十市皇女、伊勢神宮に参ゐ赴く時に、波多の横山の巌を見て、吹芡刀自が作る歌

河上の　ゆつ岩群に　草生さず　常にもがもな　常娘子にて　（巻１－22）

川べりの　巌々に　草が生えないで若々しいように　いつまでも変わらずにわたしもありたい
永遠の乙女で

天武天皇の皇女十市皇女が従姉妹の阿閉皇女（後の元明天皇）とともに伊勢神宮の参拝に来られた。その時、供の吹芡刀自の詠んだ歌である。

舎人娘子が従駕して作る歌

ますらをの　さつ矢手挟み　立ち向かひ　射る的形は　見るにさやけし（巻１－61）

ますらおが　矢を指に挟み　立ち向い　射るというその的形の浜は　見るからにすがすがしい
※舎人娘子→伝未詳。

和銅五年壬子の夏四月、長田王を伊勢の斎宮に遣はす時に、
山辺の御井にして作る歌

山辺の　御井を見がてり　神風の　伊勢娘子ども　相見つるかも　（巻１－81）

山辺の　御井を見に来て通りすがりに（神風の）伊勢乙女たちに　逢ったことだ

高市皇子尊の城上の殯宮の時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌一首　并せて短歌

……渡会の　斎宮ゆ　神風に　い吹き惑はし　天雲を　日の目も見せず…

（巻２－199）

……渡会の伊勢の神宮から　神風で　敵を混乱させ　天雲で　日の目も見せず…

市原王の歌一首

網児の山　五百重隠せる　佐堤の崎　さて延へし児が　夢にし見ゆる　（巻４－662）

網児の山が　幾重にも隠している　佐堤の崎の
さてあれ以来ずっと心に思っていた女の子が　夢に見えることよ

十二年庚辰の冬十月に、太宰少弐藤原朝臣広嗣が謀反せむとして発軍するに依りて、伊勢国に幸せる時に、河口の行宮にして、内舎人大伴宿禰家持が作る歌一首

河口の　野辺に廬りて　夜の経れば　妹が手本し　思ほゆるかも　（巻６－1029）

河口の　野辺に仮寝して　幾晩にもなると　妻の手枕が　恋しく思われることだ

羈旅にして思ひを発す

度会の　大川の辺の　若久木　我が久ならば　妹恋ひむかも　（巻 12－3127）

右の四首（三首略）**、柿本朝臣人麻呂が歌集に出でたり。**

度会の　大川の岸の　若久木　わが旅が久しくなったら　あなたは恋しがるだろうね

右の四首（三首略）は、柿本人麻呂の歌集に出ている

次の歌は作者未詳。

真金吹く　丹生のま朱の　色に出て　言はなくのみそ　我が恋ふらくは

（巻 14－3560）

金を練る　丹生の赤土のように　はっきりと言わないだけのことだよ　わたしの思いの激しさは

安胡の浦に　舟乗りすらむ　娘子らが　赤裳の裾に　潮満つらむか

柿本朝臣人麻呂が歌に曰く、「あみの浦」、また曰く「玉裳の裾に」

（巻 15－3610）

安胡の浦で　舟遊びをしているであろう　その乙女たちの　赤い裳の裾に

潮が満ちていることだろうか

柿本朝臣人麻呂の歌には「あみの浦」とあり、また「玉裳の裾に」ともある。

ふるさとの風
令和元年　神無月
万葉集
―神風の伊勢―

【参考資料】

・萬葉集 1～4（新編日本古典文学全集 6～9）　小学館　918／シ／6～9

・萬葉集 1～5（新潮日本古典集成 1～5）　新潮社　L911／マ／1～5

・日本書紀 1（新編日本古典文学全集 2）　小学館　918／シ／2

・萬葉集注釈 1　澤瀉久孝／著　中央公論社　L911／オ／1

・広辞苑第 7 版　新村出／編　岩波書店　R813.1／コ

・万葉集入門（別冊太陽）　神野志隆光／監修　平凡社　911.12／マ

・犬養孝と万葉を歩く（別冊太陽）　全国万葉協会／編　平凡社　911.12 ／イ

・万葉 1（日本の名随筆 61）　中西進／編　作品社　914.6／ニ／61

・万葉の歌 12 東海　加藤静雄／著　保育社　911.12／マ／12

・三重の文学　植村文夫・若松正一／編　桜楓社　L902／ミ

・三重の文学入門　三重県高等学校国語科研究会／編　三重県高等学校国語科研究会
L902／ミ

・伊勢郷土史草 7　浜口主一／編　伊勢郷土会　L243／イ／7

・「神風の」考（伊勢神宮崇敬会叢書 18）　齋藤平／著　伊勢神宮崇敬会　L900／サ

・英語でよむ万葉集　リービ英雄／著　岩波書店　911.12／リ